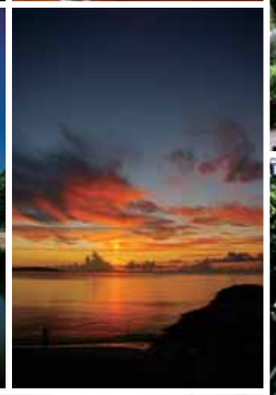
新大宜味村史「シマジマ・ビジュアル版」

わーけーシマの宝物



新大宜味村史「シマジマ・ビジュアル版」わーけーシマの宝物

大宜味村史編纂委員会 シマジマ専門部会

新大宜味村史「シマジマ・ビジュアル版」

わーけーシマの宝物

目次

発刊にあたって　大宜味村長 島袋義久 …… 1

あいさつ　大宜味村史編纂委員会 委員長 新城繁正 … 2

大宜味村の概要 …… 3

産業構造の変化 …… 4

マク名について …… 5

バールについて …… 6

田嘉里 …… 10

謝名城 …… 14

喜如嘉 …… 20

饒　波 …… 28

大兼久 …… 32

大宜味 …… 38

根路銘 …… 42

上　原 …… 46

塩　屋 …… 50

屋　古 …… 58

田　港 …… 64

押　川 …… 70

大　保 …… 74

白　浜 …… 80

宮　城 …… 84

江　洲 …… 88

津　波 …… 92

『間切・むらの変遷』 仲原弘哲 …… 98

発刊のことば

新大宜味村史は、過去の歴史を記録し、検証・評価するとともに、わたしたちの未来を構想する基本となるものです。「新大宜味村史事業」は、村民に開かれ、村民主体、村民参加によって取り組まれます。

新大宜味村史は、30年前に刊行しました「大宜味村史」をふまえ、村民が参加する新しいテーマと方法で進めることを理念に、新大宜味村史編纂委員会が平成22年11月に発足し、翌年7月に「新大宜味村史編纂計画」を策定。新村史のための調査・資料収集等に着手しました。すでに、全字で「戦争証言」の聞き書き記録を終了しました。

「新大宜味村史」は、ほぼ10年をかけて、次の各編を編集・発刊する計画であります。

前期　「シマジマ・ビジュアル版」「シマジマ」編　「戦争証言集」

中期　「人と自然」編　「移民・出稼ぎ」編　「民俗・ことば」編　「写真集」

後期　「通史」編　「資料」編

自治体としての大宜味村の実体は、17のシマ（字・行政区）から成り、それぞれ個性と特色があります。これからつくっていく新大宜味村史に共通する基本となるものとして、各シマの歴史文化、自然の特色等を、後世に受け継いでいく「宝物」ととらえ、本書「わーけーシマの宝物」を、新大宜味村史の第一冊目として調査・編集し発刊いたしました。

本書は、「大宜味村ふるさと発見ガイド」（大宜味村商工会・平成15年）を基に、各区の方々に情報の追加や確認作業等で協力していただき、新たに編集したものであります。多くの皆様のご協力に感謝を申し上げます。

村民にとっても、新発見、再発見が多くあることでしょう。本書が、村民をはじめ多くの人々、とくに若い世代の人々に読まれ、活用されることを願っております。

平成26年　3月31日

大宜味村長　島袋義久

あいさつ

大宜味村では平成23年７月に「新大宜味村史編纂計画」を策定し、その計画に基づいて調査や資料収集などを行っています。平成24年度から「シマジマ・ビジュアル版」「シマジマ」「戦争証言集」「人と自然」「移民・出稼ぎ」「民俗・ことば」「通史」「写真集」等の各編を発刊する計画です。

最初に発刊するのがこの「シマジ・マビジュアル版」です。

大宜味村は17の集落で構成されています。17集落はそれぞれの個性があり、大宜味村を理解するためにはまず17集落の概要（個性）を知ることが重要だと思います。

このようなことから、このビジュアル版においては17集落ごとに、歴史、文化、自然、人の繋がり方などを理解しやすいように編集しています。

村民にとっては新しい発見や再認識されることがあるかもしれません。

集落という地域を知ることにより大宜味村を知る道標になればと思います。

この冊子が村民を始め多くの人々に有効に活用されることを願っています。

平成26年　3月31日

大宜味村史編纂委員会 委員長　新城繁正

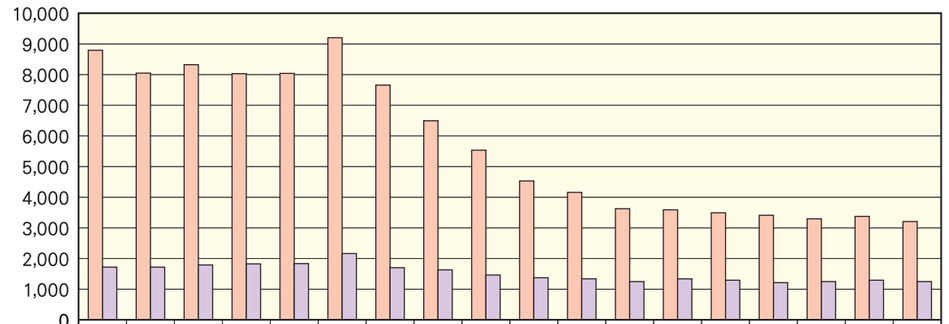
大宜味村の概要

大宜味村は、北は田嘉里川の近くで国頭村と、東は沖縄本島北部を縦に２分する脊梁山地を境にして東村と、南はガタ川の分水嶺を持って名護市に接し、西は国道58号が走る東シナ海に面している位置にあり名護市街から約22キロメートルの距離にある。

東西約８キロメートル、南北約14キロメートル、面積は63.45平方キロメートルで県内では９番目の広さを持つ。面積の70パーセント以上を山林が占め、河口に形成された狭い平野部に14集落、山地部の平坦部に３集落の計17集落が点在している。人口は約3,300人、世帯数は約1,300世帯で過疎化が進行している。

歴史を遡ると大宜味村がやや現在の位置に定まったのは1673年でその時は13村（字）で形成され田港間切が創設された。その後1682年に大宜味間切に改称された。その後幾度かの村（字）の併合・分離で境界の変化があったが、1719年に現在の大宜味村の範囲に確定され、現在に至っている。

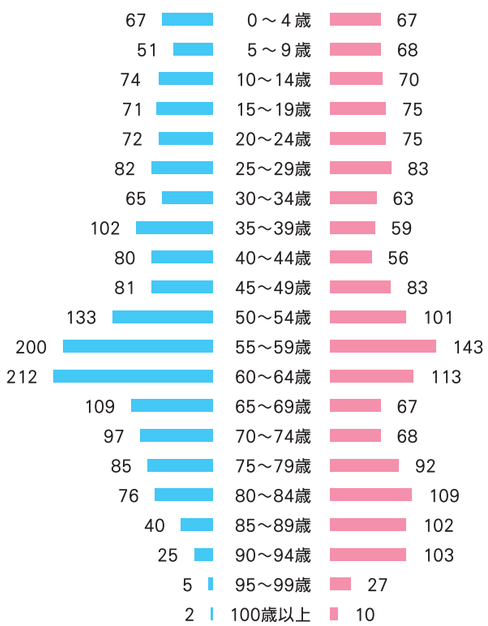
■大宜味村の人口、世帯数の変遷



	大正９年(1920)	大正14年(1925)	昭和５年(1930)	昭和10年(1935)	昭和15年(1940)	昭和25年(1950)	昭和30年(1955)	昭和35年(1960)	昭和40年(1965)	昭和45年(1970)	昭和50年(1975)	昭和55年(1980)	昭和60年(1985)	平成２年(1990)	平成７年(1995)	平成12年(2000)	平成17年(2005)	平成22年(2010)
人　口	8,780	8,026	8,347	8,023	8,037	9,208	7,648	6,497	5,552	4,535	4,178	3,626	3,567	3,513	3,437	3,281	3,371	3,221
世帯数	1,724	1,703	1,783	1,827	1,823	2,146	1,722	1,612	1,459	1,372	1,314	1,249	1,338	1,296	1,223	1,233	1,285	1,267

■年齢別人口構成表とグラフ

（大宜味村地区別年齢別人口集計表より・2013年3月１日現在）



	男	女
０～４歳	67	67
５～９歳	51	68
10～14歳	74	70
15～19歳	71	75
20～24歳	72	75
25～29歳	82	83
30～34歳	65	63
35～39歳	102	59
40～44歳	80	56
45～49歳	81	83
50～54歳	133	101
55～59歳	200	143
60～64歳	212	113
65～69歳	109	67
70～74歳	97	68
75～79歳	85	92
80～84歳	76	109
85～89歳	40	102
90～94歳	25	103
95～99歳	5	27
100歳以上	2	10
計	1,729	1,634

バールについて

ムラ（現在の字）の区分、区域、組、班といったような意味で、呼び名はその区域の地形の特徴や地名、代表的な屋号などによってつけられている。

普通に「○○バール」「○班」と言い、ムラ（字）の行政、文化行事、家族や人の活動の最小単位の組織である。人を認識するにはバール名と屋号を言えばすぐわかる。

バールはムラの誕生の原形と思われ、シマンツ（島人）の原郷である。よそで暮らしていても人々の結びつきの原点はバールである。シマンツ（同郷）意識あるいは「われわれ」意識を生む歴史、文化、人間関係のあらゆる要素がバールには凝縮されているとも言えよう。

「大宜味村史」には「バール（地租）」小見出しで次のようにも述べている。「村は幾組かの地租からなりたち、地租は共同体の基礎単位をなしていた。大宜味間切では、この地租を俗にバーリ又はバールといっている。このバールは中頭・島尻地方における仲村渠のカリ、カリ屋などと同一の語源をもつもので、村わかれの義をもち、ワカレからバカリ、バーリ、バールと音韻転訛をきたしたものとみられる。バールはもともとマキョを構成する幾つかの血縁集団の居住地（小字）を総称するものであったが、島津侵入後地割制度が確立されるに従い行政的地租の性格をもつようになった。」

■大宜味村各字の班・バール区分 (H24年度調査)

班・バールの機能	班・バール区分	その他の区分
田嘉里（１班、２班のように呼ばない） • 各班、班長・代議委員を出す。 • ３月３日は班ごとに行う。	ヤハビ班（グナ１班・２班・３班） ヌグンナー班、ヌグン班 ウエダ班、スンバル・ミサト班 第一団地班（新）、第二団地班（新）	
謝名城（バールは班と一致しない） 【班】 • 各班、班長・代議委員を出す。 • 班毎の集まりは特に無い。 【バール】 • 各４区分のバールは実質的な機能はなく、呼び名として残っている。ただし、別のバール区分（３つ）ではバールウガンを行っている。 →その他の区分参照	グシクバール（１班） ヒサンメーバール（２班） ネジャメバール（３班・４班） テンナスバール（５班）	【バールウガンの地域区分】 １）グシクバール ２）ネジャメバール （ヒサンメーバールを含む） ３）テンナスバール 一例として、ネジャメでは男性の中からウガンガーミ（１年交代）、ウガンサー（２年交代）各１名を出し、バールのウガンを年に数回行う。旧３月３日からの任期。
喜如嘉（バールは班と一致する） • 各班（=バール）、班長・代議委員を出す。 • 班（=バール）ごとに３月３日、アブシバレーを行う。	イシンサキバール（１班）、メームイバール（２班）、ナーカンバール（３班） イシブンバール（４班）、ナハダンバール（５班）、クランバール（６班） ナスンバール（７班）、トゥクチンバール（８班）、（ウロー）（現在なし）	
饒波（バーリは班と一致しない） • 実質的なバーリ、班の機能はなく、呼び名として残っている。	ハマバーリ（１班・団地） ナカバーリ（２・３・４班） ウイバーリ（４・５班）	【戦中頃のバーリ区分】 １班　ハマバーリ（浜原） ２班　サーバーリ（下原） ３班　メーバーリ（前原） ナカバーリ（中原） ４班　クシバーリ（後原） ５班　ウイバーリ（上原） ６班　シシチキカイクン ７班　ギミドー

■大宜味村各字の班・バール区分 (H24年度調査)

班・バールの機能	班・バール区分	その他の区分
大兼久 （バーリと班は一致するが、それより古いと思われるジョーという区分が存在する） • 各班（バーリ）、班長・代議委員を出す。 • 各班（バーリ）、初墓参の翌日に班常会をおこなう。 • 班（バーリ）の親睦会を毎月行うところもある。 • 班（バーリ）で模合をしているところもある。	１班バーリ ２班バーリ ３班バーリ ４班バーリ ５班バーリ ６班バーリ ７班バーリ ８班バーリ	アブシバレーのハーリー競争地域区分がある。門構えがどのジョウ（＝道）に向かっているかで分かれるという。 １）ミージマンジョウ ２）ナハンジョウ ３）アガリンジョウ
大宜味（バールと班は一致する） • 実質的なバール、班の機能はなく、呼び名として残っている。	イジンガーバール（１班）、アサギバール（２班）、ナハンゾバール（３班） ターバール（４班）、キンナーバール（５班）、団地（新） （エイガイバール）（現在なし）	
根路銘（バールと班は一致する） • 各班（バール）、班長・代議委員を出す。 • 各班（バール）、初墓参の翌日に班常会をおこなう。 • アブシバレーは班（バール）毎に行う。	フェムティ・フェーバール（１班） ナハンバール（２班） ニシムティバール（３班） ターバール（４班）	
上原（バールと呼ばないが区分はある、班と区分は一致しない） • 最近まで班長をおいていたが、現在は実質的な班の機能はなく、呼び名として残っている。	ウイバル（１・２班） マーランガー（３班） アンニ（４班） サーウイ（５班） ウンドウジョウ（新） マーランガー団地（新）	ウイバルは更に １）ウイバール ２）ナカバール ３）シチャバール と分けられる。現在、呼び名として残っている。
押川（バールと班は一致しない） • 実質的な班の機能はなく、呼び名として残っている。	ワキジバル（１班）、ウシチャードーバル（２・３・４班） ウタキヌメー（５班）、（ムタバル）（現在なし）、（ウタキヌクシ）（現在なし） （カレルバル）（現在なし）	
塩屋（班とバールは一致しない。バールは２段階の区分がある） 【班】 • 各班、班長・代議委員を出す。 • 塩屋区班長会の後、班常会を班ごとに毎月行う。 • 各班の会計があり、班長が担当。 • 初会、３月３日、アブシバレーは班毎に行う。 • 班毎にごみ置き場を設置。 【バール区分１（組）】 • 各バール（組）に会長（塩屋はニーセ頭）・組長（婦人代表）がいる。 • 各バールにチョウビシャ（会計）がいる。 • 豊年踊りは組毎にとりくむ。 • 各バール毎に昭和41年～共同売店設立。塩屋、大川の建物は残っているが、現在は解散、又は個人経営になっている。 • 塩屋組は「森川子供会館」があり、現在、毎月班常会やサーバールの会合もしている。 ※結の浜は新設の為、上記の伝統行事の区分に組み入れられていない。	【バール区分１（組）】 ウッカーバール （大川組、大川向上会）（１・２・３班） サーバール（塩屋組）（４・５班） ハニクバール（兼久組、三星会） ※結の浜（新） 【バール区分２】 ハニクメーバール（6・7班） ハニクフシバール（8・9班） 【バール区分２】 • バール毎にハーリーシラシ（男性）、ミキの準備（女性）を行う。 ※結の浜は新設の為、上記の伝統行事の区分に組み入れられていない。 • 区民運動会の組み分け。 ※結の浜も加え５つのチーム対抗。	

田嘉里

【屋嘉比ノロ管轄】

［よみ］たかざと　［方言名］ヤハムティ

［マク名］クイシンヌマク（屋嘉比）、マラクイヌマク（親田）
ユフッパヌマク（見里）
ウチクイシンヌマク（野国、野国ナー）
フーシンヌマク（潮原）、ハニマンヌマク（福地）

〈旧暦行事〉※現在神人不在
旧3月　サンガツサンニチ ※班ごと（3日）
旧4月　アブシバレー ※班ごと
　　若草御願（アブシバレー翌日）
旧5月　ウマチー（15日）
旧6月　チキスーミー・ミーメー・御初米（25日）
旧7月　海神祭（旧盆明け初亥）
　　ウスデーク（海神祭の翌日）
旧8月　シバサシ ※各自
　　豊年踊り（15日）
旧9月　ウガンフセー（3日大安）
旧11月　タヒンネー折目（つちのとの日）
旧12月　鬼餅（8日）

〈新暦行事・活動〉
1月　生年祝い ※各自（3日）
3月　彼岸 ※各自（春分の日）
4月　清明 ※各自（吉日）
9月　彼岸 ※各自（秋分の日）

田嘉里は、屋嘉比（ヤハビ）、親田（ウェーダ）、見里（スンバル）の三つの集落で構成され、北は国頭村、南東は東村に接し、大宜味村の最北端に位置する。

もともとは国頭間切に所属し、1673年に田港間切に編入されたが、1695年に国頭間切へ再編入され、さらに1719年に大宜味間切となった。屋嘉比村は『絵図郷村帳』（1648年）に記録されており、古琉球時代に形成された古い集落である。親田村、見里村は18世紀初頭までに形成されたとみられる。1903（明治36）年に三村が合併し、各村の名から一字を取って田嘉里となった。

集落は田嘉里川（屋嘉比川）流域に位置する。山地は国頭山地とその西側に開ける河岸段丘丘陵地からなる。『おもろさうし』には、屋嘉比港が港として利用されていた状況が謡われ、かつての河口は現在の河口から1km以上内陸に入った屋嘉比集落付近にあり、根謝銘グスクが利用されていた頃の港はこの地だったと考えられる。後世堆積して陸化し、水田が開かれた。当時、屋嘉比の港には沖縄本島周辺各地や、更に奄美諸島との交易船が盛んに出入りし、大正期には、山原船が停泊し、薪炭や木材を積み出していた。戦前は薪などの林産物が豊かな産地として知られ、終戦後も炭焼きに従事した人もいたが、現在は山の仕事は行われなくなり、サトウキビや果樹栽培が主である。

旧三集落の祭祀は、国頭村浜を含めて屋嘉比ノロが管轄しており、行政的に分断されながらも四集落の祭祀は深いつながりを持って継承されてきた。また、根謝銘グスク内の大城御獄（ウフグスクウタキ）は、屋嘉比ノロが管轄する御獄として現在でも田嘉里が拝んでいる。その事から根謝銘グスクと屋嘉比港、更に屋嘉比、親田、見里の三集落は密接な関わりを持っていた事が分かる。

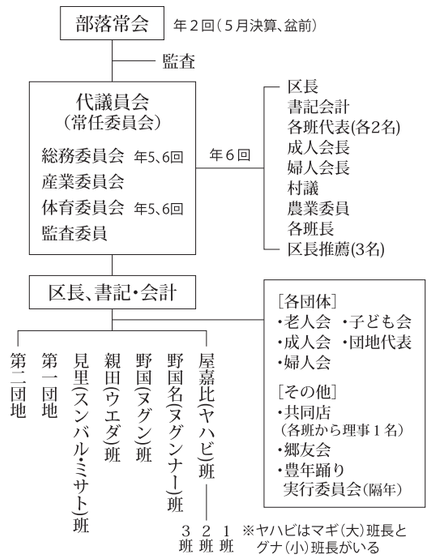
区で管理する拝所はアサギ、ウントー、ウイクジ、ウイグシク、竜宮の神（浜）、ヌンドゥンチ、ヤマグチである。神アサギは、屋嘉比集落（屋嘉比バール）の最も高い所にあり、隣接して、山口、芝といった旧家が立ち並んでいる。

［人口・世帯数（平成25年２月現在）］
319人（男164人、女155人）　134世帯

農業統計（農業センサス）

農家数（戸）			耕地面積（ha）		
業態＼年	1975	2010	種類＼年	1975	2010
専　業	13	8	田	14.69	ー
第１兼業	18	3	畑	13.88	5.39
第２兼業	41	19	樹園地	10.89	10.36
計	72	30	計	39.46	15.75

田嘉里の産業は酒造業と農業が中心である。農家数、耕地面積とも減少傾向にあるがサトウキビ、柑橘類（温州ミカン、タンカン）は村内でも主要な生産地である。



田嘉里のウスデーク

ウンガミ行事として、旧盆明け初亥の日にグシクウガミ、その翌日にウスデークを行う。クラサ、アサギマー、ヤマグチマー、ヌンドゥンチの順にウスデークを奉納しながら進み、最後にクラサに戻る。

クラサ（蔵下）M-1　アサギマー M-2　ヤマグチマー（山口庭）M-3　ヌンドゥンチ（ヌン殿内）M-4

謝名城の宝物

城（グシク）のウンガミ（海神祭）

城（グシク）のウンガミは海の神だけではなく山の神もお迎えして五穀豊穣、豊漁をユンクーイ（祈願）する祭祀で、最も重要な祭事とされ、毎年旧盆明けの最初の亥の日、東方の高台、ウイグシクで行われる。古い形の神歌（ウムイ）、神アシビが伝承されていて、中城御嶽やアサギ、アサギ庭で厳かに祈りを奉げる。現在では、神人のなり手が少なくなり、形態は簡素化されているが、一連の祭事は今なお受け継がれ、いにしえより続く神々と人間との関係を感じる事が出来る。

祝女殿内で祈願後、「カアカアー」を打ちながら上城へ登る。

神人たちによる以前のウンガミ儀式
（上：アサギ内、下：アサギマー）

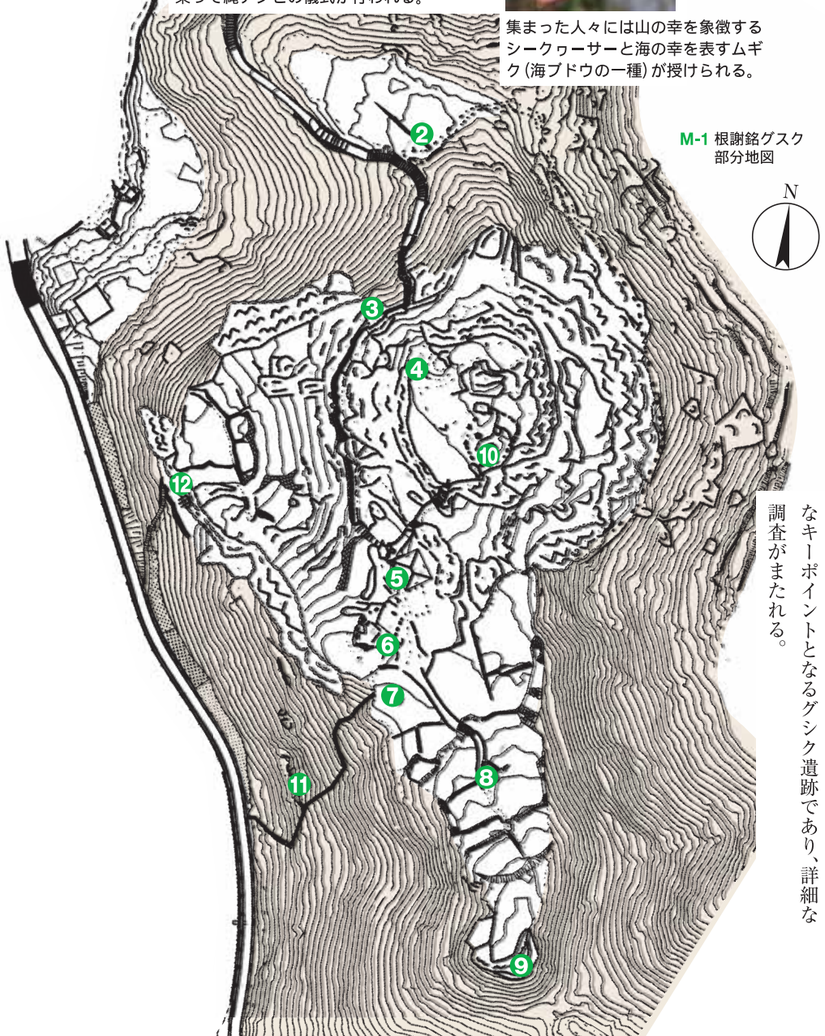
少年がたたくカアカアーの独特なリズムに乗って縄アシビの儀式が行われる。

集まった人々には山の幸を象徴するシークヮーサーと海の幸を表すムギク（海ブドウの一種）が授けられる。

根謝銘グスク（ウイグシク）

M-1

12世紀前後に築城されたと考えられる城塞的なグシクで、地元では「上城（ウイグシク）」と呼んでいる。かつての城村の背後、標高百メートルの丘陵頂上部に立地する。古生期石灰岩の割石で石塁を巡らし東北側の尾根筋は人工的に堀切で切断しており、堀切は沖縄本島では初めての発見となる貴重な遺跡である。グシク内には大城御嶽（ウフグシク）と中城御嶽（ナカグシク）があり、ナカグシクウタキの隣には神アサギがある。国頭地方を治めた国頭按司の居城跡であるといわれている。頂上部の試掘調査では、土器、須恵器、青磁、白磁、南蛮陶器、鉄器、牛骨等の遺物が出土しており、村内では遺物が発見された唯一の遺跡である。山原のグシク文化や集落との関係を読み解く重要なキーポイントとなるグシク遺跡であり、詳細な調査がまたれる。



M-1 根謝銘グスク部分地図

ナハマー（仲庭） M-2
昔、ノロの馬を繋いだとされる場所。

地頭火の神 M-7
ウンガミではアサギでの儀式の前に祭の予告祈願を行ったあと、中城御嶽と喜如嘉七滝拝所に向かって祈願を行う。クンガチウマチーでは稲穂を供える。

フッキー（堀切り） M-9
人工的に堀切りされた跡で敵の侵入に備えたもの。

上城ガー M-8
グスク時代に人が住んでいた頃の生活用水、飲料水で使用された。

馬浴みしガー（井泉） M-4
馬に水浴びをさせたという井泉。水が豊かであった証し。

グシクのビジュル M-3
願い事や占い事をする霊石。持ち上げられるか持ち上げられないかで吉凶を占う。

大城御嶽 M-10
『琉球国由来記』に「中城御嶽」と記されている屋嘉比村の御嶽で、現在は田嘉里集落の拝所となっている。

城の神アサギ M-5
謝名城集落の神アサギで東側の広場はアサギマー。周辺に生い茂るクスノハカエデの木はアサギの材料として使われた。

現在はセンメント瓦だが、戦後、昭和20年中頃まで茅葺だった。

按司墓 M-12
中城御嶽にあった骨を納骨した場所ともいわれる。

ミートゥガー（夫婦ガー） M-11
二つの石囲い跡（井戸跡）があるためそのように呼ばれる。

ナカグシク（中城御嶽） M-6
『琉球国由来記』に「小城嶽」と記されている城村の御嶽で、現在は謝名城の拝所となっている。

喜如嘉

【城ノ口管轄】

［よみ］きじょか
［方言名］キザハ
［マク名］クガニマク

〈新暦行事・活動〉
1月　新春マラソン大会（2日）
　　十六日祭（16日過ぎた日曜日）
3月　当局選挙、監査
4月　新当局並代議員就任
　　予算編成委員・監査委員選任・予算編成
　　各種団体総会
5月　班長交代、海浜清掃作業
7月　美化作業
9月　敬老会、小学校美化作業、村陸上大会
10月　班長交替
12月　美化作業
※毎月第2・4火曜　ウスデーク歌練習

〈旧暦行事〉※現在神人不在
旧1月　川御願（2日）
旧3月　サンガツサンニチ※班ごと（3日）
旧4月　アブシバレー
旧5月　グンガチグニチ（5日）
　　5月ウマチ（15日）
旧6月　6月ウマチ（15日）
　　アキウイミ
　　ウキザイ（25日）
旧7月　七夕（7日）
　　旧盆（15日）
　　海神祭（盆明け初亥）
旧8月　米寿祝い（8日）
　　シバサシー御願（10日）
　　十五夜祭（15日）
旧9月　カジマヤー（7日）
　　川御願（9日）
旧11月　タントイ
　　ウニウイミ（つちのとの日）
旧12月　オニモチ（8日）

大川下流域に位置する集落で、元々は国頭間切に所属していたが、1673年に田港間切に編入され、1682年より大宜味間切となった。集落の南西部の海浜砂丘からは、沖縄貝塚時代後期の土器や貝製品が大量に出土しており、（喜如嘉貝塚）、また、喜如嘉村は、『絵図郷村帳』（1648年）に記録されていることから、大宜味村でも古い時代から人が住んでいた地域ととらえられる。

集落の前面は、かつては美田地帯で知られていたことから、地元では「喜如嘉ターブク（田圃）」と呼ばれ親しまれている。またターブクのあった一帯は東シナ海が湾入りした入江で山原船の出入りもあった。現在はサトウキビや野菜等の耕地が広がっている。

喜如嘉の祭祀は城ノロの管轄で主要な拝所にヒンバームイや七滝拝所がある。ヒンバームイは展望のよい公園として集落では大切にされ、七滝拝所一帯は樹木の伐採が禁じられている。ウンガミでは、根謝銘グスクへの拝みに神役が参加した後、集落のヒンバームイで、七滝拝所、グスクへ遙拝を行う。

喜如嘉の芭蕉布は、近代期に一時衰退したが、平良敏子氏を中心とする女性達が織り手になって再興させたものである。1974（昭和49）年に国の重要無形文化財に総合指定され、2000（平成12）年には平良敏子氏が人間国宝に指定、現在では県内外から多くの伝承生が集まり芭蕉布技術の習得に励んでいる。

喜如嘉は居住域と河川を含め農地、山、川、海等の自然域がコンパクトな範囲にまとまり調和を見せる集落である。集落には「芭蕉布の里」を象徴する芭蕉が至る所に植えられており、赤瓦民家やフクギ並木の集落道と共に、美しく特徴的な景観を形成している。また、喜如嘉板敷海岸の板干瀬も貴重な資源である。先人達は屋敷囲いの材として板干瀬を利用した時期もあり、集落に残るこの屋敷囲いも喜如嘉の特徴の一つである。

喜如嘉臼太鼓と喜如嘉エイサー等の民俗芸能が、隔年の喜如嘉祭りで踊られ保存継承されている。

字内には、喜如嘉芭蕉布会館があり、芭蕉布の製造工程や製品と共に、作業の見学もできるようになっている。1996（平成8）年に『喜如嘉誌』（字誌）が発行されている。

［人口・世帯数（平成25年2月現在）］
424人（男212人、女212人）　226世帯

農業統計（農業センサス）

農家数（戸）			耕地面積（ha）		
業態＼年	1975	2010	種類＼年	1975	2010
専　業	35	14	田	7.4	0.46
第1兼業	10	2	畑	19.99	7.18
第2兼業	44	8	樹園地	7.04	5.41
計	89	24	計	34.43	13.05

喜如嘉の産業は工芸（芭蕉布、木工芸品）、農林業が中心である。以前は水田でい草が栽培され畳表の生産もあったが現在は花卉類（オクラレルカ、フトイ）等が栽培されている。そのほかに、柑橘や熱帯果樹が生産されている。林業では木炭の生産がある。

区民総会　年1回（5月）
　監査
代議員会
予算編成委員
総務委員
監査委員
　毎月
　区長
　書記会計
　各班代表
　各団体長
　村議
区長、書記・会計

1班　石崎（イシンサキ）バール
2班　前森（メームイ）バール
3班　仲ケ（ナーカン）バール
4班　石保（イシブン）バール
5班　仲田（ナハダン）バール
6班　蔵（クラン）バール
7班　苗代（ナスン）バール
8班　渡口（トゥクチン）バール
※班という前は組とも言った

［各団体］
・老人会
・成人会
・婦人会
・青年会
・子ども会

［その他］
・みかん園（区管理）
・共同店（区管理・請負制）
・ウスデーク保存会
・喜如嘉まつり実行委員会
・那覇七滝会（郷友会）

喜如嘉まつり
バサーチン（芭蕉布の着物）を身に纏った女性たちがウスンデークやエイサーを披露する。

主な施設

喜如嘉保育所 M-29

喜如嘉小学校 M-28

喜如嘉共同売店 M-27

喜如嘉公民館 M-26

芭蕉布の碑
村商工会記念事業で建立。
山之口獏の詩が刻まれている。

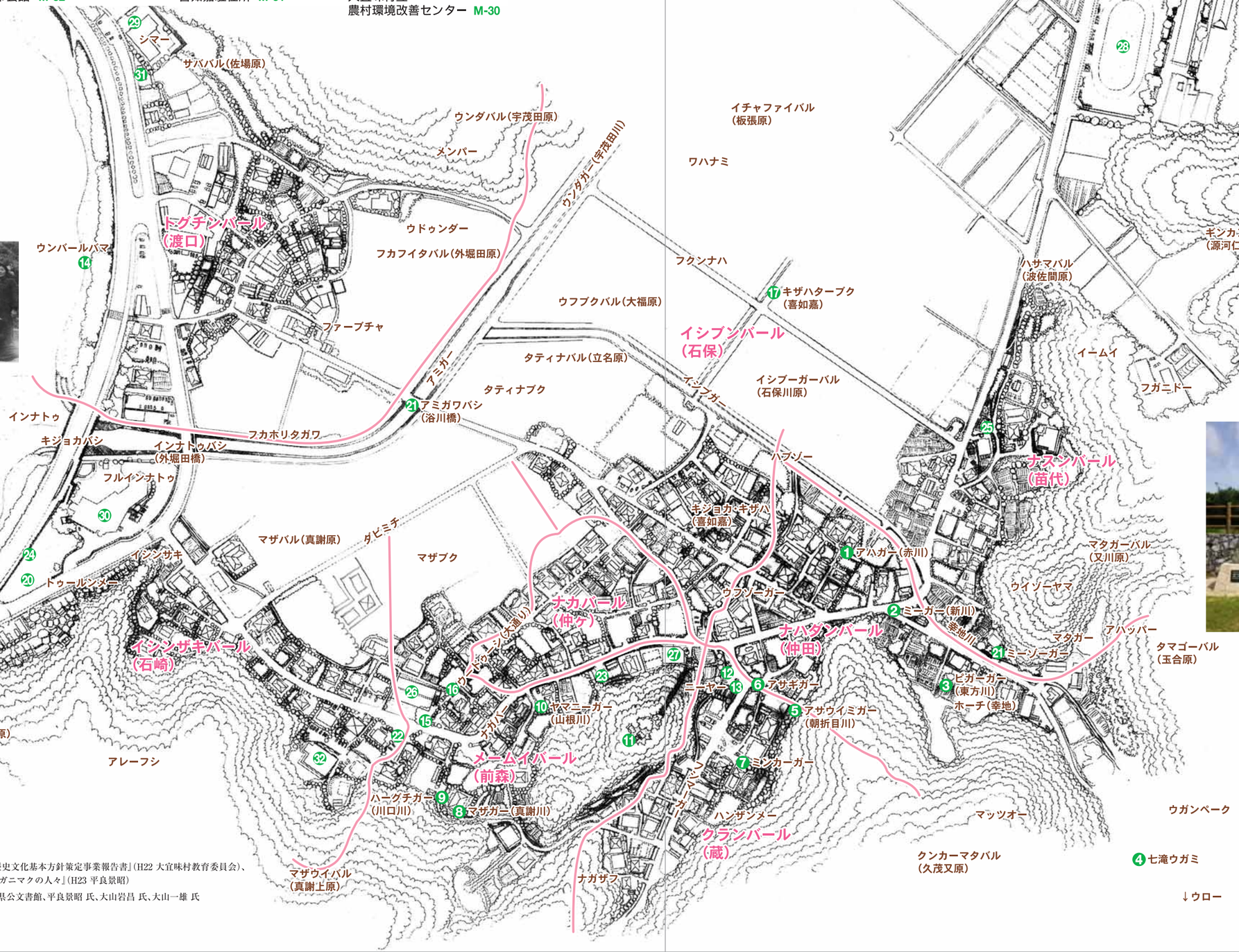
芭蕉布会館 M-32

喜如嘉駐在所 M-31

大宜味村立
農村環境改善センター M-30

大宜味村営火葬場 M-33

火葬場設置運動の後、1951年に喜如嘉で字として火葬場を建設、1967年に村営に移管。それまでは女性が洗骨を行っていた。(写真は火葬場設置委員1951年 喜如嘉誌より)



平良真順の胸像 M-22
※p98「大宜味村の人物」参照。

金城清松離郷記念樹の石碑
※p99「大宜味村の人物」参照。
M-23

特攻隊寺内少佐の碑 M-24

故寺内博之とその妹、浅野綾子の歌碑。『心篤き／人ら住めりとこの岸に／導かれけむ／兄がからかも』。1945年喜如嘉の浜辺に特攻隊寺内少佐(当時20歳)の遺体が漂着。喜如嘉の人々が敵機を避けつつ日暮れて引きあげ埋葬。浅野綾子はその妹。喜如嘉の人々の篤き人情に感謝する歌である。今日も交流を続けている。2012年4月建立。

喜如嘉民謡の碑 M-25
喜如嘉朝憲作詞。個人宅庭にある。

〈参考出典文献〉
『喜如嘉誌』、『大宜味村文化財基礎調査及び歴史文化基本方針策定事業報告書』(H22 大宜味村教育委員会)、『喜如嘉の写真集』、『シマの宝物　喜如嘉＝フガニマクの人々』(H23 平良景昭)
〈写真提供〉喜如嘉区(喜如嘉の写真集)、沖縄県公文書館、平良景昭 氏、大山岩昌 氏、大山一雄 氏

マングローブの再生植樹活動
大保川河口に当たるハンザキからイクサンザキにかけては植樹活動で根付いたマングローブの緑のベルトが護岸沿いに続く。

ワイトゥイ M-13

旧道ワイトゥイは、丘を迂回して大保方面に続く道だったが、2003年にトンネルが完成し、まっすぐな道ができた。一つ目の丘はメーヌパーと呼ばれ、白浜、宮城、塩屋の集落が見渡せ、塩屋湾のすばらしい風景を望むことができる。メーヌパーを越えたところはハンザキと呼ばれ、一時期、銅の製錬所があった。

メーヌパーの広場からの景色 M-14

1962年の景色（沖縄タイムス）

船の渡しとバスの発着地

塩屋大橋開通以前、白浜－塩屋間の行き来は伝馬船の渡しが主流で、1933（昭和８）年の湾内一周道路開通までは乗合自動車の発着地として飲食店等が建ち並びサーカスが来る程の賑わいであったという。穏やかな塩屋湾を伝馬船が船尾を振りふり渡っていく姿は風情があり、郵便配達員が自転車と一緒に乗り込んだり、渡し賃がソバに化けたため、服だけ船に乗せ泳いで渡るつわものもいたという。

平良保一生誕の地碑 M-16
※p00「人物伝」を参照。

登野喜屋キャンプ場 M-18

白浜公民館 M-17

ムラ墓 M-15
県道９号沿いアカサキにあるムラ墓には入り口が二つあり、１班用、２班用に分かれている。ブリバカ（群れ墓）、モロバカ（諸墓）、ムエーバカ（模合墓）などと呼ばれる。

〈参考出典文献〉『津波小学校100周年記念誌』、『津波小学校85周年記念誌』、『沖縄国頭の村落（上）』、『大宜味村文化財基礎調査及び歴史文化基本方針策定事業報告書』（大宜味村教育委員会 H22）

ミチキマールウガン（三月廻る御願）

旧１月、５月、９月の吉日に行うムラ御願。区長と有志数名が集落内の拝所を廻りシマの繁栄や健康祈願をする。

アサギ（阿舎慶） M-2

お宮 M-1
火の神２つとシマンホーが祀るという香炉が一つある。平成７、８年頃に現在の位置に移動した。

お宮より海に向かい拝む。

ミー川 M-5
別名ムラガー。飲み水を汲んだり洗濯をした。

ウブガー（産川） M-4
産湯につかう水を汲んだ。水が赤い年は女の子、白い年は男の子が多く生まれるといわれている。

タキサン（御嶽） M-3

クラサガー（蔵下川）
M-9

サバガー（佐場川） M-8
ミーミジを汲んだ。海岸近くのため山原船の水汲み場となり、水量豊富で旱魃になると近くの村々から小舟で汲みに来たという。

ミートゥガー（夫婦川） M-7
夫婦の様に寄り添った井戸。
現在水はない。

ピンカガー　現在は下から遥拝している。
M-6

白浜の宝物

～白浜の豊年祭～

ウンガミのウグゥンマールの年には豊年祭が行われる。以前は踊り手は男性のみ、３日間に亘っていたが、現在は女性も加わり、郷友会の協力等も得て１日で行う。「サーサイ」の掛け声でイシルールまでミチズネーの後、ハタジョウに旗を立て公民館を舞台に行われる。この日ばかりは小さな集落の人口が何倍にも膨れ上がる。

ハタジョウ M-12

豊年祭

イシルール M-11

塩屋湾のウンガミ

白浜は田港ノロが管轄する四ヶ字の一つとして塩屋のウンガミに参加する。

前日はヤフアサギに設置するクムーをつくり、ウンガミの１日目には屋古のハーリーに乗船する。

〈ウグゥンマール２日目〉
～ヤーサグイ～

ウグゥンマールの年には田港と白浜の神人がヤーサグイを行う。区民は集落の入り口で太鼓とカチャーシーで神人を迎え、神人は旧家とお宮を回り祈願をする。最後は全員で海に向かって拝む一連の行事だが、近年は、神人の高齢に伴い行われなくなった。

神人を迎え入れる。

ウイクランニー（上倉根） M-10
旧家。ウンガミのヤーサグイで拝む。曲玉が伝えられている。

ニレーの海に向かって拝む。